
おはよう

いずみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おはよう

【コード】

N7049V

【作者名】

いずみ

【あらすじ】

ある女子高生の朝の話。他サイトで公開中のものです。

(前書き)

一応、私の代表作です。

けたたましく鳴り響く目覚まし時計を止める気力もなく、私はじつと目を閉じていた。

朝だ。

ああ、朝が来てしまった。

頭の中で、昨日の光景が蘇る。目を見開いた友人、その瞳に宿る深い悲しみ。一瞬後に、私の中に込み上げた後悔。

本当ならそれは些細な口喧嘩で、数時間後に仲直りのメールが交されるはずだった。それなのに、私の口から滑り落ちたその一言が、友人を深く、傷つけてしまった。

教室から出て行った友人を追いかけて、すぐに謝れば良かった。でも私は、それが出来なかった。ただ呆然と立ち尽くし、窓の外の雨音を聞いていた。

手遅れなのだ、すべてが。

うつ、と唸って寝返りを打つ。朝の光が私の首筋をなじる。それはあまりにも熱くて、私は布団をつかんで頭の先まで引っ張り上げた。目覚ましの音がくぐもる。

綿の塊の下で、私は安堵の息を吐く。この生温かい布団の中から、もう一度夢の世界に行けないだろうか、是非とも行きたいと思った。しかし、現実の世界には秩序というものがある。大人は社会に出て働かなければならないし、学生は学校に行かなければならない。無力な女子高生である私が世界の秩序に抗えるはずもないが、それでも脳裏では昨日の嫌な光景がちらついていて、板挟みになった私は結局、夢の世界へ行かずに布団の中でじつと目を閉じたままだった。

諦めたのか、目覚ましが大人数しくなった。急に静かになったもの

だから、変な耳鳴りがした。私はまだ、布団の中で粘っている。

どのくらい経っただろう。ドアの開く音がして、母の声が私の名前を呼んだ。起きなさいという意味だろう。しかし呼ばれたのは一度だけで、母の足音はすぐに遠ざかって行った。

私の部屋は居間と繋がっているので、ドアが開けられると、居間の音がよく聞こえてきた。

父の話に、弟の笑う声。母が食卓に皿を並べる音。テレビのアナウンサーの澄ました声は、どこかで起きた残酷なニュースを伝えている。

居間を外れた小さな部屋で、私は一人布団に包まり、悶々と悩んでいた。

そうして、私はあることを思いついた。

学校を休んでしまおう。

それがいい。思いついた途端、私の思い描いていた『今日』は一気に塗り替えられた。くすんだ色から淡いパステルに変わったそれは、私の望んだ夢の世界に似ていた。

今日一日だけ。そう、今日は英単語のテストがあったはず。勉強していないし、悪い点を取って落ち込むよりは、始めからやらない方がいい。

ずっと布団の中にいるのも息苦しいので、私は目を閉じたまま、布団を少しめくった。休む理由は何にしよう。風邪気味と言えば医者に行かせられるし、腹痛は女子だと危機感がないように感じる。ここは頭痛がいいだろうか。

母が再び私の名前を呼んだ。遅れるよと叫んでいる。母の足音が、居間から部屋に近づいてくる。

うまくやらなきゃ。私は固く目を瞑る。まずはもっともらしく唸って布団の中で縮こまるのだ。母が何か言う前に、弱々しい声で、

頭が痛いと言を吐く。母が体温計を持ってくる。私はでたらめな数値を読み上げる。今日は休んでおく？ うん、そうする……。これでいい。これで、上手く行かない現実とはおさらば。そうすれば、私は、私は。

ふ、と。

味噌汁の匂いが、私の鼻をくすぐった。

匂いに誘われて、私はそっと目を開けた。視界に広がったのは、昨夜と変わらない私の部屋。違うのは光の差す角度だけだった。

賑やかな居間から、その匂いは漂ってきた。素朴な味噌の匂いに加えて、塩鮭の匂いもする。

幸せなその匂いに反応するように、私のお腹が小さく鳴った。

ああ、朝だ。

私はそこで、本当に目を覚ましたのだった。

私が起き上がると、部屋を覗き込んできた母と目が合った。

「出来てるよ、あんたの分の朝ごはん！」

母は早口にそう言うと、忙しそうに部屋の入口から去っていった。私は一人頷いて、ベットから降り立つ。

今日休んでしまったなら、きっと明日もそれを引きずってしまうだろう。そうすれば、いつまでも友人との関係は気まずいままだ。そしていくら休んでも、英単語テストは消えてくれない。今日行けば、何かが変わるはず。どう変わるかは分からないが。

とにかく、行かなければ始まらないと、私は気付いたのだ。

「おはよう」

居間にいた父と弟に声を掛ける。談笑していた二人は私の方に振り返って、「おはよう」と私に笑いかけたのだった。

一日が始まる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7049v/>

おはよう

2011年11月11日04時54分発行